

プロータゴラスの教育と徳を中心として

霞 信三郎

プロータゴラスは「あらゆるものの尺度となるものは人間である。あるものについてはあるといふことの、あらゆるものについてはそれがあらぬことの」といい、又それにつづいて「おのゝものゝものが、それがわたしにこんな風なものであると現われるように、わたしにとつてまさにそのようにあるのであり、君にとつてもまた君に現われるようにある。そして人間とは君や私のことなのである」とチアイテース篇(Thaetetos, 152a)にのべている。人々は以上のプロータゴラスの言説をもつて、プロータゴラスの人間尺度論(Homo-mensura-proposition)又は人間尺度説(Homo-mensura-Satz)と呼ぶ。

ところで、彼の思想において、「あらゆるもの(萬物)の尺度(Pantōn chrēmatōn metron)は人間(anthrōpos)である」といふその「人間」とは君や私である(anthrōpos de au to hega)。「どのべているところから、我々は、彼がおのゝ個人はあらゆるものについての判断の主体であるとのべていると理解する。なお、彼がおのゝものが自分にこんな風なものであると現われるように、自分にとつてまさにそうであることであり、君にとつてもまた君に現われるようにある(ōn ōta men hekasta enoi phainetai kōanta men estin enoi, ōta de soi, tōnta de au soi)」とか、更に「各人に思われるところのようには、それはまた実際そうありとする(ōn to dokein hekasti kōanta hui estin; Thaetetos, 161c)」とのべているところから、我々は彼が自分に感覺知覚されるものはそのまま實在であり、かくして個々人によつて感覺知覚されたものが、それが、そのまま實在であると考へなければならぬ。

以上、彼の人間尺度論は、第一にあらゆるものの判断の主体は個人であり、第二に實在は客人に感覺知覚されたものであると要約されると思う。かくして、事物はまず個々人の感覺知覚、即ち主観のうちにおいてのみその存在性をうるものであるとすれば、主観による判断以外にその存在性を与えるものはなく、次ぎに主観力判断の唯一の標準であるとする限り、この世界に於て客観的にして普遍妥当的な真理というものはなく、主観に真理と思われることが真

理であるということになる。ここに真理の多様という現象が生ずる。そしてこの現象が人々を通して相対主義と懷疑主義とにむかわせることは当然である。しかし、プロータゴラスにおいてこの事態はそのまま放っておけないことであつた。すなわち、彼に於て主観による判断の普遍妥当的真理が貫徹されなければならない。もしも、それが不可能であるとすれば、彼の人間尺度論はその第一歩からくつがえされなければならない。彼の一切の思考はたてなおしをしなければならない。

しかし彼はあえてそれをせずに、彼の主観主義、そしてそれから生ずる相対主義と懷疑主義の生ずることを認めながら、それをそのままに、強引に「主観によつてえられた判断は普遍妥当的な真理である」という彼の主義を押し切らうとする。——かくして、ここに彼はその方法として、所謂「弁論術」(methode)をもち出すのである。しかも又、この弁論術は彼の公言によれば「弱い議論を強くする」(kon hēto logon kreittō potein, Dielo 42, Dielo 106)の方法であつた。それはまさに、邪を正のように、白を黒のようにみせかけ、ごまかすところの説得の術であり、弱い議論すなわち立論の根柢の薄弱な議論を強化し、正当化し、又相対主義と懷疑主義を生じるような議論をそれが生じる余地のないように相手をいいくるめるところの、みせかけは正しいが、ごまかしの、所謂「詭弁の術」であつた。換言すれば、相対主義と懷疑主義とを導き出す主観主義を言論によつて強引に正当化せんとする弁論術であつた。

しからば、彼のこのみせかけ、ごまかしの態度は、必然に人を陥し入れることを第一とする詭辯的態度と利己主義とを生きてゆけばよいという利己主義、快楽主義を生んでいく。事実、プロータゴラスを始祖とするソピスト達(ソピステス)に毒せられたアテナイ(アテナイ)市民の中には、ソクラテス(Sokrates)をして「好まざる友よ、アテナイ人でありながら、最も偉大にして且つその智慧と偉大との故にその名も高き市の民でありながら、出衆得る限りの多量の蓄財や、又名聞や栄誉のこののみを念じて、却つて、智慧や真理や又その靈魂を出来得る限り淨らかならしめることについては、心を用いもせず考えもせぬことを、君は恥辱と思はないのか」(In 106c αὐτῶν, ἀφελὸς ὡς πόνεος τῆς μετρίτης καὶ εὐσκόλων τῆς εἰς σοφίαν καὶ ἰσχύ, χρημάτων καὶ οὐκ ἀδύνατον ἐνμελιόμενος ὅπως σοὶ ἔσται ὡς πλεονέστα, καὶ δόξης καὶ τιμῆς, φρονίσεως δὲ καὶ ἀνδρείας καὶ τῆς ψυχῆς ὅπως ὅπως σοὶ μετρίτης ἔσται οὐκ ἐνμελιῇ οὐδὲ

apologies;”) (apologia sacratio 890)と憂うに沈ませるものと見え出て来たのであった。

しかしプロターゴラスは市民をして陥穽主義、利己主義、快楽主義に墮落させ、ポリスを破壊と混乱におとし入れるためにこのような弁論術——詭弁術をもち出し、このことによつて彼は「教育と徳の教師」(paideutēs kai agogētes dakotai kai agogētes, Protog. 329a)であろうとしたのであつたらうか。この問題は彼の神話 (mythos, Protog. 320d-322)を吟味することになくしては解答せうることが出来ないと思う。しかれば我々はここにプロターゴラスのミュートスの問題にしてみよう。

二.

プロターゴラスは彼のミュートスに於て、昔プロメーテウス (Promētheus) が人間に衣食住を創り出す「技術知を火と共に」(ten technēn sophian sun phai) 与えた。かくして人間は「生活に關する知慧」(phai ton hion sophian) をうることが出来た。しかし集團生活をせずしては、人間は野獸に對して劣弱であつて、次第に亡ぼされていった。そこで、これを心配したゼウス (Zeus) はヘルメース (Hermēs) を遣はして人間が集團生活、即ちポリスの生活をなし、「ポリスの秩序を紐帶として親愛の結合者となるように、人間に羞恥の心と正義の心をもちしめた」(Zeus ein……, hermēs pempē agantē eis anthropous aidōn te kai dikēn; hion ein protēn kōsmos to phai deesi philia sunagōgē, Protog. 322c) しかるなお、ゼウスは羞恥の心 (aidōn) と正義の心 (dikē) とはすべての市民に与えられるように配慮し、それらを待つに堪えないものは「ポリスの痼疾」(nosos politikē) として死刑に処するといふ法律を与えるがよいとした。

ところで、人間の生活には火と共に生活知即ち衣食住を創り出す技術、つまり生活に關する知識が必要であらうが、なお更に、それに加えてゼウスによつて与えられた羞恥の心と正義の心とは人間が眞のポリス的人間生活を営んでいくための市民的技術、智慧としての政治の術 (politikē technē)、即ち政治の智慧 (politikē sophia) をうみ出している母体として必要であつた。——かくして、政治の術、政治の智慧をささえているものは、羞恥の心と正義の心であるということになるが、——しかもなお、プロターゴラスが、市民たるものが誰でも必ず俱有する必要のあるような、いさしくと都市が成立しうるために必要な徳は、羞恥の心と正義の心から發する正義の徳、恩恵の

徳・敬虔の徳であること。(dikaiosunē kai sophrosunē kai to kaston einai, Protag. 345a)であること。しからば我々は以上彼が言っているところから、真にポリス的人間としてその生活さへてゆく徳は何かということの問題にした場合、それは以上のべたような諸徳であるを理解しなければならぬ。そして次に心にとどめておかねばならないことは、これらの諸徳は神から与えられたものであるということである。それは、まさに、神がポリスを形成すべきあらゆる市民に与えたポリス存続のための根柢であると同時に、市民相互をポリスなる共同体において生存せしめておく市民のポリス的優秀性であった。そしてこの優秀性は神から賜わったものであって、人間の工夫によってえたものではなく、従って人間の智慧の眷外にあるものである。かくして、以上の徳は永遠性・普遍性・絶対性を、その性格をになうべきものである。

ところで、ポリス的倫理としてポリスを存続させ、市民を存在させる永遠にして、普遍・絶対性をその性格としてになうべき神によって与えられた諸徳も、般においては、その現実的なものとして各々の市民に現われるためには、市民が教育されることを必要とする。つまり、教育には「配慮と修練と訓育」(ἐπιμελέας καὶ γυμνάσεως καὶ δειξιῶν, Protag. 344d)が必要であるところのものであった。——しからば、般においては、神から与えられた賜物たる「人間をして持続的國家を構成し、常に一致して相互扶助をなすことを可能ならしめる」永遠・普遍・絶対的性格をになっている諸徳は、「徳は教えられ附与されるものである」(ἀρετὴ διδασκόμενα παραδίδεται, Aegonintai aretēn, Protag. 344c) 範疇にはいるものであって、「教育と徳の教師」として、彼が公言している彼のたづなわるべき徳であったであろう。しかし以上の諸徳のみが「教育と徳の教師」として、彼がたづなわるべき徳であつて、弁論術は彼のたづなわらなくともよい徳であつたであろうか。

三.

プロタゴラスは人間の生活において學ぶべきことは、「いかにすれば自分の家をもっとも善く育えることが出来るか、又いかにすればポリスの事に關して言行の両方面においてもっとも有能であることが出来るかを示すような家業やポリスの事についてのすぐれた智慧をうることでなければならぬ」(το δὲ μάθημα εὖτεν εὐδαιμονίας περὶ τὸν οἶκον, ἁγίως ἂν ἀνίστα τὴν ἡμετέραν οἰκίαν διοίσει, καὶ περὶ τὸν τοῦ πόλεως, ἁγίως τὰ τοῦ πόλεως διατάκτατα αὐ εἶναι καὶ πράττειν καὶ λέγειν.

Protagoras 3/8e) などのべているが、家事やポリスについてのすぐれた智慧は、詮じつめれば政治の術の智慧であり、それを学び、我がものとすることは、羞恥の心と正義の心を母体とする神の賜物たるポリス的人間の諸徳を学び、我がものとするところである。しからば彼は以上のいみのポリス的人間の徳の「教育と徳の教師」であつて、「詭弁術」の「教育と徳の教師」という悪名を残さずにすんだ筈である。しかるに、すでにのべたように、彼は人間尺度論のもとに主観性の原理を第一に押し立て、先ずあらゆる事物の決定者は各人それ自体の感官知覚であつて、人間のあらゆる判断は主観によつて成立すべきものであり、そしてそのまゝその判断は客観的なものであり、普遍妥当的なものであるとした。しかもそれを裏証するためには、「弁論術」を学ぶにしくはないとしたのであつた。又彼はそれを公然と報酬をとつて教えたのであつた。しからば彼がこの「弁論術」というポリス的人間の優秀性を与える「教育と徳の教師」であつたことはいうまでもなく、又そのことは彼に対する当時のアテナイの青年ヒッポクラテス（*Hippokrates*）をはじめとする、彼の追隨者たちの信仰ぶりや、彼の弁論に対する聴衆の喝采の熱狂的であつたこと（*Protag. 314e, 334c*）などによつてしられると思う。まさに、アテナイの青年たちを魅了し、拍手喝采を叫ばしめたものは、彼の「弁論術」を駆使しての新奇、巧妙、華麗、実利性をもった弁論であつた。そして弁論の巧みさ、又は「弁論の雄」（*deinos legôn, Protag. 312d*）となるが、いかに当時の青年たちに渴仰されていたか。我々は次のような当時のアテナイの政情とあわせて考えてみればわかると思う。すなわち、彼の時代はペリクレス（*Perikles*）がデーマゴゴス（*démagogos*）＝民衆の指導者）としてアルコン（*archon*）＝統領）の地位につき、アテナイはデモクラティア（*démocratie*）＝民主主義）の恩潮の絶頂のときにあつた。それであるから当時家柄や財産は公衆生活において何等の特権を与へるものではなく、なすところからいへば有能な青年たちにとつて、ただ希望を托しうるものは言論であつた。しかもそれは新奇、巧妙、華麗、実理性にのみ、理非はともかく、自からを「弁論の雄」になしうるような「弁論」、つまり「弁論術」を我が手におさめることであつた。そして、このような「弁論術」の教授を人々は求め、プロクタゴラス自身、ポリス的人間の諸徳の重要であることをしりつゝ、よく多く当時の青年たちに特に要求されているものであり、又彼の主観第一の原理に立つ人間尺度論が圧倒的優位に立つべきだとする態度は、彼の「教育と徳の教師」から、「弁論術」＝詭弁術としての「教育と徳の教師」に小えつていったものだと思う。そしてこの「詭弁術」こそ、授業料をとつて教え、付与すべき価値の

ある徳であつたのである。

かくては、我々は、彼をして悪しき名、詭弁、学派の始祖なる名をまぬかれることを可能にすることは出来ない。そしてこの事は、要は、彼が「神から与えられたボリス的人間の徳」と「人間尺度論」にききをおく「弁論術」、すなわち客観的徳と主観的徳との間に横わるギヤツプを嚴密に吟味せずに、簡単に自ら「弁論術」の「教育と徳の教師」になつていったことにあると思ふ。いな、絶じて徳を「教えるもの」附与しうるものとして單純に主張し公言する彼の徳についての思考の甘さ、徳を教育することはいかなるものであるべきかという吟味の慎重の足りなさにとづくものではないであらうか。

(一九五九、二・九 P・M 一〇・三〇)

筆者 倫理學担当教授